

題目 格差を経験すると他者を信頼できなくなるのか？
—社会的交換ネットワークを用いた実験的検討—

氏名 犬塚敦也

指導教員 高橋伸幸

所得格差が存在すると、社会に様々な悪影響があることが知られている。Wilkinson (1992) は、先進国において所得水準や格差が人々の健康に及ぼす影響を検討し、所得格差が大きな国ほど平均寿命の伸びが短くなる傾向があることを示した。また、Uslaner(2002)は国際比較を通じて、ジニ係数と呼ばれる所得格差の指標が世界の各地域における他者への信頼感と負の強い関係をもつことを明らかにした。これらの先行研究が所得格差そのものに注目していたのに対し、アメリカの政治学者であるパットナムはイタリアでの調査を通じて、その背景にある人間関係の構造における格差に注目した。北イタリアでは人間関係が平等な水平的ネットワークであったため、社会関係資本が形成され、他者を信頼できるような社会が構築された。しかし、南イタリアでは人間関係が従属的な垂直的ネットワークであったため、社会関係資本が形成されず、他者を信頼できない社会が構築された。この結果、南北の間で経済発展に大きな差が生じてしまったとパットナムは主張する。では、社会関係資本の形成に影響を与える要因は、人間関係のネットワークに格差があることのみなのだろうか。南北の経済発展の差だけではなく、南イタリア内では垂直的ネットワークにより、地位が上の人と下の人の個人所得の格差も徐々に増大していったと考えられる。この徐々に格差が増大していくというプロセスも社会関係資本の形成に影響を与えていたのではないだろうか。本研究では、南イタリアのように人間関係のネットワークに格差が存在する場合に、徐々に個人間の所得格差が増大していくというプロセスを経験することが、社会関係資本の形成を妨げ、他者を信頼できなくなるということを検討するため、実験を行った。その結果、ネットワークの構造に関係なく、所得格差が徐々に増大していき、格差が大きくなった場合は、その格差により、社会関係資本が形成されず、他者を信頼することができないという結果が得られた。この結果から、徐々に格差が生じるプロセスの経験が社会関係資本の形成を妨げる効果を持つことが示された。しかし、人間関係のネットワークにおける格差が存在しない場合でも、徐々に所得格差が生じたため、さらなる検討が必要な結果となった。